

文化的景観をなじませるための計画策定

Resolution to Adapt the Cultural Landscape

川村 慎也（四万十市教育委員会生涯学習課） KAWAMURA, Shinya
(Lifelong Learning Division, Shimanto City Board of Education)

1. 四万十市の重要文化的景観

四万十市は高知県西南部、四万十川が196kmの蛇行を終え土佐湾に注ぐ河口に位置する地方都市である。四万十市における重要文化的景観は、四万十川本流と支流黒尊川及びその流域の山間地域、本流と黒尊川の合流点に位置し川港として機能した口屋内集落、四万十川河口で港湾の機能を担ってきた下田集落から構成される。これらの景観は四万十川の流通往来と河川での漁労等の生業の景観として重要文化的景観の選定を受けている。

また、四万十川流域の重要文化的景観では、流域の5つの市町が個々の景観の特質を活かしつつ、選定から利活用まで連携して取組を進めている。

2. 選定時の状況

四万十市での重要文化的景観の取組は十分な準備を経て始まったわけではない。選定時には多くの積み残しを残したままスタートを切ることとなった。

文化財への取組の浅い地域で、地域景観の意味を考えるきっかけになったこと、流域という枠組みを活かす組織づくりができたことは一定評価できる反面、広域な選定を急ぎ足で駆け抜けたため、選定地域に暮らす人たちの理解や、行政等の文化的景観保護制度への理解、価値を活かした流域連携の進め方等は選定を追いかける形で始まることとなった。

3. 整備活用計画の目的

整備計画策定にあたっては、大きく2つのことを目的として考えていた。

1つは、文化的景観をなじませるための時間づくりである。選定時に十分にできなかったことの多くは地域住民や行政において文化的景観を咀嚼する時間が不足していたことに起因するものと考えられる。そのため、計画策定の過程で住民や行政の関わり代を作ること、文化的景観をなじませるための時間を確保することを狙った。

もう1つは、様々な試行錯誤をするための道標を明らかにしておくことである。四万十川流域の文化的景観は

自然環境の良さが文化的景観の大きなベースとなっている。しかし、その環境に対する適切なアプローチの検討には基礎情報が不足しており、文化的価値の検討と合わせ、継続的な調査やチャレンジによって蓄積されなければならない情報が多くある。限られた時間や予算のなかで多様な取組をうまく成果に活かすための道標を作っておくことは、事業を振り返りその先を考えるときに有用であろうと考えたのである。

(1) 考える体制づくり

文化的価値が変わり方を考える文化財である以上、地域では変わり方を考え続け、選択を重ねていく必要がある。そのため整備活用計画の策定にあたって、まず考え続ける体制づくりから始めることとした。

現在は文化的景観を考える糸口やプロセスを地域外の専門家に頼りがちだが、いずれはその景観に近いところで景観形成の方向性を考えられる力をつけたいと考えている。そのためにこの計画策定期間を活用したいと考え、四万十市重要文化的景観整備活用計画検討会を組織した。この検討会は素案の作成を担う作業部会と、素案を元に計画を検討する検討会の2部構成にしており、作業部会は地域の専門家や行政の実務担当者、地区住民等を中心とし、検討会は地域外の専門家と市文化財保護審議会委員で構成している。この作業部会や検討会を通して行政担当者や地域住民、市の文化財保護審議会委員等に文化的景観の制度や考え方、展望が時間をかけてなじむよう期待している。

(2) エリアの個性を活かす

四万十市重要文化的景観整備活用計画では四万十市の重要文化的景観を構成する3つのエリア（黒尊地区、口屋内・四万十川本流地区、下田地区）毎にその特質に沿った価値の整理、景観を考えるための基礎情報の蓄積、利活用の方法を検討することとした。計画をエリア毎にオーダーメイドすることによって暮らす人が「じっくりくる」計画を目指したい。とくに利活用については試行錯誤を繰り返すことで、計画の精度や実効性を高めていきたいと考えている。

この3つのエリア毎の計画を基軸として計画自体や個

別の案件を同じ場¹⁾で検討するようにし、文化的景観全体のバランスを図りつつ運用を試みている。

(3) 協議の迅速化

文化的景観の範囲内では様々な対応・協議事項が生じる。これについて委員や関係者数の多い検討会をその都度開催することは現実的に難しい。事前に内容や文化的景観への影響の程度等によって検討を行う小グループを設定しておき、案件に対して迅速な対応が図れるようなフローを試行している。

対応を急ぐ必要がある場合は、少人数で意思決定を行い、後日その判断を全員で振り返りを行う等いくつかの方法を試すことでより適した検討方法を見つけないかと考えている。

(4) 経験を蓄積するために

個別の案件について検討した結果は、案件の概要及び対応の考え方、その対応に至る一連を記録化し、蓄積して後の案件を検討する際の材料として活かすことができるよう準備したいと考えている。そのため案件対応についてのフォーマット²⁾を用意して記入する作業を進めている。このフォーマットの利用には、当初予想したよりも記入に多くの時間を要すること、検索等で類似事例を抽出しにくいことなど改善の余地があるものの、今後の対応の精度を上げるため継続的に取り組んでみようと考えている。

4. 作りながら整える計画

四万十市における重要文化的景観の整備活用計画は身幅に応じたものにするため、実際の事例で試行錯誤を繰り返しつつ整えていきたいと考えている。以下では修繕や開発行為での対応事例とソフト面での取組の事例を挙げ、現在の取組状況を説明する。

(1) 屋内大橋修繕

屋内大橋は四万十川と支流黒尊川の合流点に位置する口屋内という集落に架かる沈下橋である。曲線を多用した形状で、四万十川流域の沈下橋の中でも特徴のある橋梁として知られている。この沈下橋が橋脚下部の洗掘によって平成22年(2010)8月に沈下を開始し、橋脚1基と床版2枚が損壊した。この沈下橋は重要文化的景観における重要な景観構成要素であったため、文化的景観保護推進事業補助金を利用して修繕することとした。修繕には設計と取り壊しに1年、橋脚と床版の復元に2年、補修に1年の計4年を要する予定である。

四万十川の沈下橋は昭和30～40年代に作られたものが多く、制作から30年近くが経過しているため今後も他の橋梁で類似の修繕が必要になる可能性が高い。その

ため今後の修繕の見通しや沈下橋の現状、修繕の際の留意点等を明らかにするため2カ年をかけた調査を進めている。

(2) 下田津波避難タワー

四万十川の河口に位置する下田集落では南海地震とそれにもなう津波対策が進められている。その対策の1つとして津波避難タワーの建設がある。当該タワーは重要文化的景観選定前に着工され、選定後に津波予想高度の改定を受けて増築を行った。景観の中での素材や高さの異質感は否めないものの、地区としては日常的な避難タワーの利用が災害時の備えになると考えて積極的な活用を進めている。現在は夕涼みの場所として、盆踊りの会場として利用が生まれ始めている。新しい構造物については、建設時の配慮だけでなく、その利用を通じて地域の景観に馴染んでいくプロセスについても後押しできるような方法も考慮していきたいと考えている。

(3) 地域が語るしくみづくり

文化的景観を良くしていくためには、その景観に暮らす人たちがその価値について十分に認識することが必要である。そのために自らの暮らす景観について語る言葉を増やし、語り始めることが大切である。整備活用計画にはそのようなプログラムを継続的に取り組めるよう記載したい。効果的なプログラムを検討するための手始めとして、地域で様々な役割を担う人と文化的景観を結び、できることから試行錯誤しているいくつかの取組を紹介したい。

ア. 黒尊川生態調査

地域に住みこんで河川をフィールドに研究する生態学者と文化的景観を結んで行っているのがテナガエビを中心とした黒尊川での生態調査である。テナガエビは四万十の食材として知られる甲殻類で、子供の遊びから大人の小さな収入源まで多様な関わりがある。「エビ筒」と呼ばれるしかけを使った伝統的な漁法が今でも流域で用いられており、夏場を中心として川の浅瀬に筒が連なって仕掛けられている様子を随所で見ることができる。このエビとの関わりを通じて幼い頃から川を知る経験を積むことができ、川を見、川を語る人を創るきっかけを生む生き物のひとつと言える。

近年このテナガエビの漁獲量が減少していることが認識され始めており、現在の生業等を維持するために今後何らかの対応や対策が必要になる可能性が高い。そのためにはテナガエビの生態や現状を良く把握することが不可欠である。平成23年(2011)から開始したこの調査を通じて徐々にこれらのことが明らかになりつつある。調査に参加する地元の人たちも経験的なテナガエビの知

識と専門家を通じた科学的な知識が結び付けられて、新鮮な驚きを得ていて調査成果以外の効果も生まれている。調査は5年間を目処に成果をまとめ、バランスのとれた保全に向かいたいと考えている。

イ. くろそん手帖

平成21年（2009）に5市町で重要文化的景観の選定を受けた際に流域で制作する地図について検討を行い、流域で3つのスケールの地図を充実させていこうと考えた。3つのスケールとは、1つは流域5市町を俯瞰する地図、2つ目が市町村単位の構成要素へたどり着ける地図、3つ目が集落や構成要素周辺を歩く地図である。

四万十市では3つ目のスケールの地図についてこれまでに3つの地区で制作を行ってきた。平成23年度には河口の町下田と四万十川と黒尊川の合流点の口屋内で地域の小学校と連携し、10ヶ月をかけて小学生とともに地図の制作を行った³⁾。この時できた地図をきっかけに黒尊川流域でも地域の住民団体「しまんと黒尊むら」と協働して地図の制作を行うこととなった。3つの地区での地図製作において留意したのは、地域のコーディネーターやデザイナーに制作当初から関わってもらい、完成品の質を高めることで、地域で手にとってもらえる、使ってもらえる地図にしようと考えたことである。

黒尊川流域の地図は『くろそん手帖』として完成し、その活用を3年程継続している⁴⁾。

『くろそん手帖』は延長31kmの黒尊川を2mの蛇腹折りにおさめた白地図をベースにしている。これは訪れる人がその時の記録を書き込むことで捨てられない地図にすることを狙いとしており、時期や目的ごとのコンテンツについては、別にA4サイズの資料を制作して配布している。コンテンツと地図を分離させたことで、地図には余白が生まれ、コンテンツは旬のものに絞って情報提供ができるようになった。

このくろそん手帖を使って、年間5回のツアー（くろそん手帖手描き散歩）を実施している。ツアー内容は黒尊川流域の散歩から川遊び、稲刈り、紙漉き等地元では日常的な暮らしの一部を体験する内容である。

このツアーは参加者数を20名程度に設定して、地域の人が参加者の「名前を覚えられるくらい」の人数で行うようにしている。ツアーの成果は参加人数の多さではなく、黒尊の人たちとの関係が生まれることにある。現在参加者20名の内訳は、概ねリピーターが半分、新規参加者が半分くらいで年齢も2歳児から80代まで多様である。ツアーを通じて地域外の参加者との関係も少しずつ育ちつつある。

くろそん手帖は個々の来訪者が書き込む地図であるた

め、出来上がる地図を並べるとそれぞれの視点や関心が現れて興味深い。これを共有するために年に1度年度末に各自が1年間使った手帖の展覧会を開催している。これによってくろそん手帖の使い方のアイデアを共有し、黒尊川流域に興味を持つ人の増加を見込む他、地域の人にとっては来訪者が何に驚き、何を楽しんでいるかを知るチャンスにもなっている。

ツアーを通じて地域に暮らす人たちが少しずつ黒尊のことを語るチャンスも増えてきており、景観を語る人の増加も見込まれるものと期待している。

ウ. サイクルガイド養成講座

近年、四万十川流域では自転車の観光利用が注目されており、イベントの開催やインフラの整備等が徐々に進みつつある。四万十川の景観を楽しむためには自転車のスピードが適していることを想定し、自転車を使った地域の景観を案内できる人材の育成に取り組んでいる。

サイクルガイド養成講座の受講生は主に市内在住の若者で、講座では景観の読み解き方だけでなく、ツールとしての自転車の乗り方、整備・修理に関わる基礎的な講習、安全管理、情報発信の手法等について実習を含めて学んでいる。

四万十川流域の暮らしは主となる生業の他に多様な副業によって支えられている側面がある。将来的にはこのようなガイドが春、秋等に地域の若者の副業的収入に繋がられるよう活躍の場や機会を増やしていきたいと考えている。

当事業を通じて、サイクルガイドのように地域住民ではないが周辺の土地勘を持つ者のほうが、その土地の住民よりも俯瞰的に景観の仕組みや周囲の景観との関わりをうまく説明できるように感じている。地域の景観を語るにはその風景の中に暮らす者だけでなく、その周辺に暮らす者の役割も大切であると思う。

5. 流域での連携

四万十川流域の重要文化的景観の特徴でもある5市町による流域連携は、文化的景観の切り口によって整理された価値の共通項を深めつつ、価値を活かしたプログラムや活動をうまく支援・創出することで地域の文化や経済に良い影響を生み出し、それが流域市町間で刺激となり化学反応が起きていくことを期待している。その連携や連動の要として流域で協議する場が育ちつつある。

（1）四万十川流域文化的景観連絡協議会

四万十川流域の重要文化的景観の特徴でもある5市町による流域連携の軸となる組織が、四万十川流域文化的景観連絡協議会（以下、文景協）である。選定時の作業

組織として発足し、現在は流域で連携した活用や共通課題についての協議の場として機能している。当会の事務局は公益財団法人四万十川財団が所管する。現在、会議には文化的景観所管課の担当者が中心に参加し、協議事項に応じて関係課の担当者も列席して協議を行っている。

（２）流域連携事業

文景協では平成20年度から、ロゴマークの制作、共通するサインデザインの設計、シンポジウムの開催、展示用パネルの制作等様々な連携事業を行ってきた。今後はさらに連携の質を高め、価値を掛けあわせた連携の方法について事業を実施しつつ検討したいと考えている。

その手始めとして平成24年度から3年間のプロジェクトとして取り組んでいるのが多様な専門分野を学ぶ大学生を募集して実施する「学生キャンプ」である。この学生キャンプは、学部も専門分野も異なる大学生約20名を4日間四万十川流域で受け入れ、年毎に異なるテーマでフィールドワークと検討を行い、最終日に小さなシンポジウムを開催して大学生が四万十川流域に対して提案を行うというスタイルをとっている。

四万十川流域に大学は存在しないが、学びのフィールドとしては良い場となり得ないかということをキャンプを運営する中で検討して行きたいと考えている。

（３）流域連携という互助

四万十川流域での流域連携にとって最も大きな課題は長期的に関わる担当者が少ないことである。元来5市町における文化的景観への期待はそれぞれで少しずつ異なっている。それに加えて人事異動等で短い期間に担当者が入れ替わるため、文化的景観の理解や制度運用の手続き、流域での連携事業等で歩調の合いにくい状況が起こりやすい。とくに文化的景観の概念の理解や各市町の文化的景観の特質の理解には時間が必要になりがちである。

そこで事務局の四万十川財団を中心として移動直後の担当者や、類似課題に取り組む担当者を流域相互で助け合う互助組織を機能させようと考えている。各市町の担当者だけで大きな課題を抱えるのではなく、流域という単位で互助できれば現状の改善に寄与できそうである。

6. 今後の展望

四万十川の流域では、人は川で遊び、川で採り、川を渡り、川で運び、川と調和して生活を営んできた。その川との関わりが現在の四万十川流域の文化を築いてきたと言っても過言ではないだろう。その調和が技術の進化や、経済、社会の変容によって大きく変化してきている。

この変化はいずれ川と人の関わりを希薄にし、縁遠いものに変えてしまうことが危惧される。四万十が四万十らしくあるために、川との新しい関係や調和を考える時期が来ているものと考えられる。

文化的景観を通じた取組は、従来から継承されてきた川との関わりを評価し意味付けることで、これまでのあり方を肯定し、そのうえに新しい関係を育てることに貢献できるものと期待している。当該地域ではまだ慣れない景観についての取組であるが、粘り強く継続していくことで地域にとって役に立つ文化的景観を考えていきたい。

【註および文献】

- 1) 発表スライドでは「プラットフォーム」と表記している。
- 2) 発表スライドでは「カルテ」と表記している。
- 3) 制作した地図は『ざまな！口屋内式玉手箱』、『まちあるき下田てくてくマップ』として配布中。
- 4) 川村慎也（2014）：「四万十川流域の景観～語り始めるための地図づくり～」；『地図中心』，第504号，p.p.16-17

Abstract: Since a large area was selected in a short period in the approach for the important cultural landscapes in Shimanto City, the processes to gain the local residents' understanding, to gain the administrative agency's understanding of the Cultural Landscape Conservation System, and to explore the procedure so that the municipalities of basin can cooperate together while taking advantage of their values were all started after the selection was made. In order to solve this situation, we have started to develop a Maintenance and Utilization Plan mainly to achieve the following two purposes: The first purpose is to arrange some time so that the local residents and administrative agencies can engage in the cultural landscapes. The second purpose is to develop a long-term plan in order to take a systematic approach. For the Maintenance and Utilization Plan, we have established a committee that consists of a mix of local experts and experts from outside regions, so that the local experts can understand the concepts of the cultural landscapes. We have held the committee meeting several times so far, and the local experts are gradually getting the idea to take advantage of the cultural landscapes. Here at Shimanto City, we have been taking the maintenance and utilization approaches in parallel to take advantage of the important cultural landscapes. As part of the maintenance approach, we are restoring important landscape elements and providing supports so that a new structure fits in the landscape, and as part of the utilization approach, we are working on the goal for the residents to be able to explain about the place they live in. For the cooperation of municipalities of basin, which is a characteristic of the cultural landscapes in Shimanto River basin, we have created opportunities so that the persons in charge of five municipalities can meet up and consider about conducting collaborative business and establishing an information sharing mechanism together.